くじゅう坊ガツル地域の自然景観

度重なる自然現象の歴史を語る坊ガツル

坊ガツル地域は、周囲を平治岳や大船山、立中山、三俣山に囲まれた盆地で、内部に湿原が広がっていますが、湿原内の各部でその様子は異なっています。地域を流れる鳴子川の上流を北からさかのぼると、初期の湿原はすでに解析されて峡谷化しており、その上流一帯に広がる火山扇状地には、流下した岩塊が転々と高まりをつくり、その間に湿原がみられます。さらに南の立中山近くの一帯は、豊富な地下水や地表水で潤された原生的な湿原が広がっています。永い間に何度も繰り返された火山活動や降雨などで生じた氾濫原から湿地を取り戻しながら、湿原を維持しているのです。

広がる湿原・草原と峡谷化した河川

湿原を潤す水溜(た)まりと沼地

湿原を潤す異常に多い地下水

坊ガツル地域の降水量は、年平均3,700ミリが記録されています。これらは県内最高の値です。この降水による鳴子川上流部の表面流出量も多くて、浸食、運搬、堆積作用も活発であることが河川の形状からうかがわれます。ところが立中山近くに広がる南部の湿原は、集水面積に対して異常に水分の多いことがわかります。この湿原は深い厚さに堆積したミズゴケに覆われており、足を踏み入れるとずぶずぶと沈んでしまうほどの泥炭層で埋められています。この一帯は周囲の森林がもつ高い保水力に支えられた豊富な地下水のもとに生成され、維持されている原生的な湿原といえましょう。

湿原の歴史をたどる貴重な植生と植物

坊ガツル湿原の植生は、ヨシ湿原やヌマガヤ湿原など9区の生育環境から、さらにヨシーヤマアゼスゲ群落やヌマガヤーヒメミズゴケ群落など23群落に分けられます。湿原を代表する群落の中でクジュウノガリヤスやフトボタニガワスゲなどは、くじゅう火山群成立の過程から湿原一帯に自生した種であり、ヤマアワ、ヨシ、ヌマガヤなどは、かつてこの地域一帯を襲った寒冷期に南下した北方寒冷要素の湿地性植物が移動して繁栄し持続してきたと考えられます。残されている貴重な植生や植物によって、坊ガツル湿原の歴史をたどることができるのです。

湿原の春の花リュウキンカ

草原の秋の花リンドウ

湿原維持の原動力となる背後の森林

坊ガツル湿原の大部分は、湿地と草原で、森林は渓流沿いと野焼きの影響を受けない外側部分に限られています。樹林の殆どはノリウツギ林で、背後に控えた平治岳や大船山など周囲の山地に発達するミズナラ・リョウブ林へと連なっています。森林の発達した山麓の谷部を流れる渓流や水溜まりは各所にみられるが、特に立中山麓の湿原に面した北側斜面の森林の各所から流出する地下水は多量で、ゆるやかな渓流となり主要部分の湿原を潤しています。湿原状態を持続させている源は背後の森林であることが一目でわかります。

湿原背後のノリウツギ林とミズナラ・リョウブ林

野鳥のフィールド湿原・草原・川と森林

生息環境で異なる野鳥の生活

坊ガツル地域に生息する野鳥は、湿原や草原と森林とでそれぞれ異なる生活をしています。湿原部にはホオジロ、ホオアカ、セッカなど草原性の鳥が生息しています。特に春から夏にかけて繁殖するホオアカにとっては重要な繁殖地です。湿原部の中央を流れる鳴子川では、カワガラスが水中に潜り小魚や水生昆虫を採っているのがみられます。森林部には夏鳥のオオルリやキビタキなどがみられます。ミズナラやブナなどの高木林が繁殖の場所なのです。森林部から湿原部にかけては、夏鳥のカッコウ、ホトトギス、冬鳥ではジョウビタキ、ツグミなどの飛び回る姿がみられます。

秀でた山々の懐に抱かれた盆地の坊ガツル

坊ガツルは、山地にあって広大な湿原と草原が背後の秀でた山々の懐に抱かれた盆地です。南側の立中山麓に広がる湿原の主要部分は、豊富な地下水に恵まれて原生的な湿原環境を保っています。春の息吹を見せ始める新緑と野焼き後の黒一色の盆地、緑を取り戻した初夏の草原、山頂一帯に広がるミヤマキリシマの紅一色の花のじゅうたんは、夏山ににぎわいをもたらしてくれます。銀白色のヨシやススキの穂波と歩調を合わせて、山頂から下りてくる紅や黄色の紅葉の秋、静かな眠りについた白一色の冬の盆地と山々。坊ガツルは、くじゅう山群の四季をひとまとめにした優れた景観の地域です。

晩秋の坊ガツル